

友禅 — 森口邦彦のわざ —



友禅 訪問着
い そう か さ う ろ こ か も ん
「位相重ね鱗花文」

友禅は、防染糊を効果的に駆使して絵画的に表現する染色技法である。江戸時代に人気のあった京都の扇絵師宮崎友禅齋の描く文様が小袖に取り入れられ、友禅流行のきっかけとなり手描き友禅染は江戸時代中期に完成。今日では、京都、金沢、東京などを中心に技法が伝承されている。

平成19年に重要無形文化財「友禅」の保持者に認定された森口邦彦は、京都に生まれ京都市立美術大学を卒業後、フランス政府給費留学生としてパリで建築とグラフィック・デザインを学んで帰国。その翌年から父・森口華弘のもと本格的に友禅を始めた。伝統的な技法を受け継ぎながらも花や雪、流水等を幾何学文様で構成・表現する作風を確立。その斬新で現代的な造形感覚は友禅の世界に新生面を拓き、その活動振りが、国の内外で高い評価を受けている。

森口 邦彦 (もりぐち くにひこ)

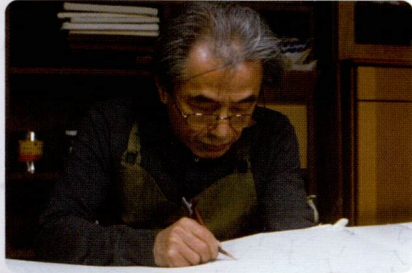
- 昭和16年 京都市に生まれる
- 昭和38年 京都市立美術大学日本画科を卒業
フランス政府給費留学生として渡仏
- 昭和41年 パリ国立高等装飾美術学校を卒業
- 昭和44年 伝統工芸第6回日本染織展にて文化庁長官賞
第16回日本伝統工芸展にてNHK会長賞
- 昭和48年 第20回日本伝統工芸展にて朝日新聞社賞
- 昭和61年 パリ・ジャンヌビッシュ画廊にて平面作品個展
- 平成4年 芸術選奨文部大臣賞
- 平成13年 紫綬褒章
- 平成19年 重要無形文化財「友禅」保持者に認定





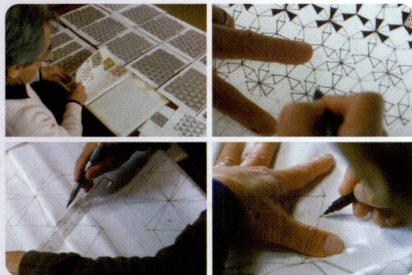
✧ プロローグ

平安時代の小袖から展開し始めた日本の着物文化は、独自の発展をみせ、江戸時代中期に京都で友禅染が完成。絵柄を思いのままに染められる友禅は大評判となり当時の生活文化を彩った。



✧ 友禅作家 もりぐち くにひこ 森口 邦彦

その伝統の染色技法を継承する友禅作家森口邦彦は、平成19年、国の重要無形文化財「友禅」の保持者に認定された。幾何学文様による自由な発想と伝統技法との融合から斬新な友禅の世界を開拓している。



✧ 構想・草稿・下絵・裏えんぴつ

膨大に蓄積した草稿から新しいデザインを構想する。全ての工程の中でデザインを決めるこの草稿の段階を最も重要視している。かかあおぼな化学青花の筆ペンで下絵を描く。青花の線は後で消えるので消えて欲しくない線を裏えんぴつで補っておく。



✧ いとめのりお 糸目糊置き

下絵の線の輪郭に、糊筒に入れたゴム糊で糸目糊置きをする。絵模様の輪郭をくっきりとさせる役目のこの作業をしっかり施しておかないと後々、輪郭がぼやけて失敗を招く。友禅には欠くべからざる作業である。



✧ あおぼな お 青花落とし

糸目糊置きがすべて終わったのち、スプレーで生地に水を含ませ、「青花落とし」に取りかかる。生地裏から水刷毛で青花の線を消してゆく。



✧ きはつゆじい 揮発油地入れ

青花の線を消したあと、さらにタオルで拭き取り、生地を乾燥させる。乾燥後に「揮発油地入れ」を施し、糸目糊を生地に十分浸透させる。



✳️ 豆汁地入れこじるじい

大豆をふやかして作る豆汁ふのりに布海苔を混ぜた液を用意する。この豆汁を使って生地に地入れを行う。色挿しをする部分に豆汁で地入れをしておくこと、染料が生地に均等に、かつ十分浸透するので色の深みが得られる。



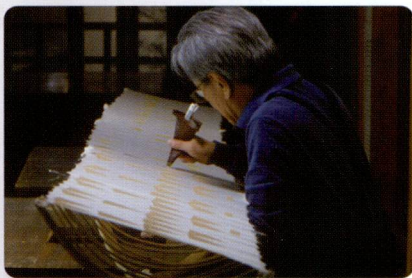
✳️ 色挿しいろさ

糸目糊で囲まれた三角形の内側に色を挿してゆく。出来るだけ生地の裏まで色を通るように挿し、染料の溜まり具合を見て均等になるように返し刷毛で全体に施す。



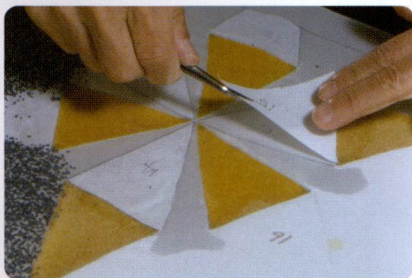
✳️ 水元みずもと

色挿しが済むと、明礬水みょうばんすいを施し、色がしっかり定着した後、水洗いをする。この工程を「水元」という。余分な染料や不純物をきれいに落とし、次の「伏せ糊」の工程に備える。



✳️ 伏せ糊ふせのり

色挿しをした部分に地色が入るのを防ぐためにその部分を糊で伏せる工程を「伏せ糊」と言う。白く残す部分にも「伏せ糊」を施し、済んだ部分には「挽き粉」を被せ、糊の表面の強度と湿度を保つ。



✳️ 縁蓋づくり・縁蓋貼りえんぶた

「蒔糊」まきのりを施すにあたって、施したくない部分の文様の形を紙に忠実に写し取って切り抜く。切り抜いたその紙を「縁蓋」えんぶたと呼ぶ。この「縁蓋」を文様の形に合わせて貼付けておけば後から蒔く「蒔糊」に縁取られた文様を残すことができる。



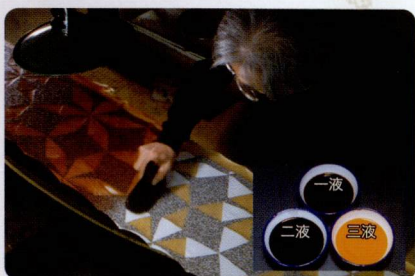
✳️ 蒔糊まきのり

漆芸における蒔絵の技法にヒントを得て友禅に「蒔糊」を本格的に取り入れたのは、森口華弘、つまり邦彦の父である。父が生み出した蒔糊のわざをさらに磨いて新しい邦彦友禅の世界を特徴づける技法となった。



※ みずじい 水地入れ

「蒔糊」を施し、十分にその密度を調整した後、一日一回、水地入れを行い、蒔糊が生地に十分くい込むようにする。これを、数日間続けてゆく。



※ 地染め (染料 = さんどくろ 三度黒)

地染めに使う黒の染料は、一液、二液、三液の三種類で深い黒を出す「三度黒」。このフランス製の植物染料が生み出す漆黒を森口は愛用する。



※ 水元・仕上

地染めを終えた反物が、みずもと水元と仕上作業のために専門の工房に運ばれる。水槽に浸して、伏せ糊や蒔糊を十分柔らかくし、余分な染料、汚れなどともに水で洗い流す。



※ 仕立て

仕立ても専門の仕立師の熟練の手にゆだねている。しかし、森口の幾何学文様の友禅は、仕立師に、その文様の合わせ目ひとつも揺るがせにできない緊張をもたらす独特の世界だ。



※ 友禅 訪問着 「いそうかさ うろこかもん 位相重ね鱗花文」完成

森口は、完成した友禅訪問着「位相重ね鱗花文」の試着を和紙クリエイターの堀木エリ子に依頼した。黒と梔子の黄色と白。その空間を埋め尽くす蒔糊。友禅の伝統に、また、新しい花を咲かせる森口邦彦の新作の誕生である。

協力 京都国立近代美術館 京都国立博物館 京都府立植物園 堺市博物館 静嘉堂文庫美術館 千葉市美術館
東京国立近代美術館 堀木エリ子 市田ひろみ美容室 黒染師 福澤佳計 株式会社 小森和裁 友禅史会
スタッフ 製作/佐藤哲夫 監督/佐野文男 撮影/大木大介 照明/古屋熱 撮影助手/鈴木一朗
助監督/牛込政雄 音楽/山崎茂之 タイトル/鶴岡秋育 録音・効果/門倉徹 ネガ編集/幸地甫之
タイミング/三橋雅之 録音/東京テレビセンター 現像/IMAGICA ナレーター/小野寺昭